

待降節第1主日 A年

第一朗読 イザヤ 2・1-5
第二朗読 ローマ 13・11-14a
福音朗読 マタイ 24・37-44

2025.11.30 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

待降節の典礼はクリスマスを準備する、そういう季節として位置づけられて、待降節を毎年過ごしますけれども、そこには二つの意味があると説明されます。

一つには、かつてイエス様が、神の独り子が人となってこの世に来られた、その出来事——ずっと昔にイエス様がお生まれになったときの、そしてそのご生涯を思い起こすっていう、かつてのことを思い起こす。と同時に、やがてそのイエス様がもう一度来られるときに迎えることができるようになっていう、その信仰を保つ、その思いを新たにする。そういうような——これも一つの表現ですけどね。だから、イエス様がかつて来られたときには、救い主がこのように来られたときには、多くの人がある救い主を拒否したんだというその現実を見据えることから、待降節の典礼ってあると思います。なので、やがて来られるときに、わたしたちがその同じ間違いを犯さないようになっていう、そういう意味があります。

でも、皆さんも考えてみて、もし自分がイエス様の時代のあの場所にいたとしたら、救い主としてイエス様を受け入れ、信じて、そしてついて行った弟子たち、完全ではないけどもついて行った弟子たちの中に自分はいらっしゃるか。それとも、なんかおかしい人、厄介な人として排斥する側、群衆の側にいらっしゃるのか。想像したことは皆さんもおありになるんじゃないかなと思います。わたしも、どう考えてもイエス様について行った側に自分がいるとは思えない、そんな感じもするんです。

それは、洗礼という儀式に参加したから大丈夫なんだ、そういうようなことではありません。一人ひとりの心の決断が問われる、そういうことですからね。

でも、じゃあもしイエス様が救い主として今ここにいらっしゃったとしたら、あるいは自分がその時代に生きていたとしたら、受け入れることができるか、それとも排

斥する側かっていうのは、今の自分自身の生活が、完璧ではないかもしれないけど特に変わる必要がない、このまま続いていって欲しいっていう思いが強ければ強いほど、救い主との出会いを妨げる要因になるということは、現実としてあるんじゃないかと思います。

今の生活が続いていって欲しいということは、今の生活に満足していることだから、そのこと自体は感謝すべきことですけれども、しかしその感謝すべきことが神様との出会いの妨げになってしまう——もちろん自分の中で作り上げた、自分にとって都合のいい神様は喜んで迎え入れることができるでしょう。しかし、十字架の死と復活を通してわたしたちを新しい命へと、ということは自分自身や他の人との新しい関わりへと導こうとされる救い主イエス・キリストとの出会いは、わたしたちがこのままでいいと思っている限りは、そこに窓口がないということになるんじゃないかと思うんです。

今日の福音では、ノアの洪水の時もそうだったっていう話が出てきますね。ノアの洪水の物語——実際にそういうことが起きたっていうよりは物語ですけども——は、旧約聖書の創世紀に出てきて、その物語ではもう人間の間に罪が広がってしまったから、もう手の施しようがないので神様はもう造り直しだって、全部リセットする、そういうようなお話でしたね。

でも、今日の福音の中では「人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた」(マタイ 24・38)と、日常の生活を送っていたと、つまり自分たちの中に罪が広がっていたっていうようなことへの認識がなくて、ただ日常生活を自分たちは送っているだけなんだっていうその思いの中で——あとで洪水によって滅ぼされるからその恐怖に促されて見つめ直すようにというようなことを現代に申し上げるわけではないんですけども——、でもただ自分たちは日常生活を送っているだけなんだと言いながら大変な罪の中にいるという可能性は拭いきれないということを、今日の福音は考えてみるように促してるんじゃないかなあと思いますね。

わたしたちが意識しなくて、知らず知らずのうちに自分の安定が続いていくために誰かを押しやっている、あるいは誰かの犠牲の上に今の生活がある、あるいはこのようなもう世界は早く終わった方がいいんだって思うぐらいの苦しみの中にいるっていう人たちから目を背けるとか、そういうような中で、ずっと生活が続いていけばい

いっていうその思いのままで良いのかと、イエス様は絶えずわたしたちに問いかけるし、そういう意味で、安心して喜んで暮らすっていうだけではなくて、本当にそれでいいのかっていう針の一刺しを心の中に刺す、それがイエス様なんじゃないかと思います。

だから、いつも満足で自分はこれでいいんだって思い続けるってということが信仰生活の実りなのではない。むしろ自分はこれでいいのかなっていう思いを絶えず心のどっかで持ち続ける。そのある意味では信仰を通して傷がつけられる——それこそがイエスの恵み——その傷を通してわたしたちは本当の神様に会っていくんだ。これが死と復活を通してわたしたちを導かれるイエス・キリストへの信仰生活なのではないかと思うんです。

毎年毎年同じように典礼の儀式的季節は巡っていくけれども、わたしたち自身がそのルーティーンの中で今のままで良いという、ある意味完璧ではないけど今のままでいいんだっていう中に眠ってしまう、それだったら日々のそういうせっかく集まっているっていうのが、次の1週間を生きていくための元気をもらうっていうような程度でしたならば、レジャーと変わらないんだということなんじゃないかと思うんです。レジャーが悪いって言ってんじゃないんです——ディズニーランドにしる、コンサートにしる、なんにしる、楽しい。楽しいと力をいただくけども、そういうものは自分への問いかけに果たしてなるだろうかと、わたしたちはやっぱり問われ続けている。

神様の前に呼ばれて、そして問われ続けていくという問題意識を持つことを通して、自分自身が、そして自分と他者との関わりが、共に生きる人々が、少しずつでもみこころに適う、つまりはより良いものになっていく、そういう一つのきっかけを持ち続けることができるんじゃないかなと思います。

今日、待降節、新たな気持ちでもう一度信仰生活を歩みましょうっていう、そういう意味で年が巡っていく。この待降節第1主日にあたって、一人ひとりがわたしたちに呼びかけておられる——自分が作り上げた神様じゃなくて——イエス様、あの時にみんなに排斥されて、でも伝えなきゃいけないことがあった、そのイエス様がわたしたちを呼んでおられるんだ。その思いというか、対話を続けるっていう意味での信仰生活を新たにすることができますように。

一人ひとりがイエス様ご自身に心を開き、そして共に歩いていく恵み、呼ばれたならばその呼びかけに答える恵みそのものもイエス様から与えられる。そこに信頼を置いて信仰生活を新たにしていく。その恵みを願い続けたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>